

特集

「多様な学生への支援：ICTを活用した高等教育のユニバーサルデザイン—聴覚障害者への支援を中心に—」

特集にあたって

広瀬 洋子

独立行政法人メディア教育開発センター 教授

ユニバーサルデザイン（UD）とは、米国のノースカロライナ州立大学ユニバーサルデザインセンター所長であったロナルド・メイスが1985年に提唱した概念である。車椅子を利用する肢体障害者でもあったメイスにとって「文化・障害・能力・年齢・性別の如何を問わずに、できるだけ多くの人々が享受できるデザイン」は、自身の生活にとっても切実なものだったに違いない。ユニバーサルデザインは障害者や高齢者への障壁を除くというバリアフリーという概念に比べて、より普遍的で根本的な変革を求めていると言える。メイスが提唱したユニバーサルデザインの7つの原則とは以下のとおりである。1) 誰でも使えて手にいれることが出来る（公平性）、2) 柔軟に使用できる（自由度）、3) 使い方が簡単にわかる（単純性）、4) 使う人に必要な情報が簡単に伝わる（わかりやすさ）、5) 間違えても重大な結果にならない（安全性）、6) 少ない力で効率的に（省体力）、7) 使うときに適度な広さがある（スペースの確保）。この概念は当初、施設や製品などハード面で強調されがちであったが、障害者の社会参画運動や高齢化社会のニーズとあいまって社会に広く浸透し、今では多くの国々で社会全体のあり方や制度を考える上でも重要な概念となっている。

とくに世界で最も早く教育分野における障害者支援を整備し、包括的な障害者差別禁止法を制定した米国では、「教育におけるユニバーサルデザイン」という概念が提唱されるようになった。学習障害児への支援と脳科学の発展が両輪となって、障害によって、個人によって多様な学習方法や支援方法が開発されるようになった。またそれを大きく後押ししたのは、インフォメーションテクノロジーの存在である。高等教育においても、大学での教育、指導、学生サービスなど、多様な学生への支援システムの構築に繋がっていった。ここでいうユニバーサルデザインとは、単一のスタイルで誰もが使えるものではなく、個別の学習スタイルやニーズに対応できる自由度の高い可変的な教材や学習方法を指している。たとえばデジタル化された素材であれば、弱視者には拡大文字、視覚障害者には音声読み取り装置で読み取りやすくし、写真や絵にはタブを取り付けて説明を入れる。視聴覚教材ならば、聴覚障害者には字幕を付与する。米国で最も

ユニバーサルデザインの教育に熱心に取り組んでいるワシントン大学では、教員に授業の内容を3つの方法で提示することを奨励している。たとえば、メディア技術を応用して音声、字幕、映像といった方法で。こうした障害者支援を目的に工夫された教材や教授法は、実は高齢者はもとより一般の学習者にも大きな恩恵となりえる。

放送大学等でも字幕が付いた授業番組は、一般の学生からも学習がしやすいと歓迎される。米国のテレビ番組やビデオは字幕を付けることが義務付けられているが、聴覚障害者のみならず、移民や海外で受信する外国人、英語学習者にとっても字幕は限りない恩恵を与えている。

そこで、本号は、ICTを活用した高等教育のユニバーサルデザインに着目し、この分野で造詣が深い研究者に寄稿をお願いし、また全国に投稿を呼びかけた。NIMEではICTを活用して全国の大学を支援する目的として、過去10年以上毎年障害者支援のFD研修会を開催し、内外の支援情報や字幕付講演コンテンツを特設サイトから配信してきた。その活動の中から、現在、もっとも多くの大学が対応に苦慮している問題で、なおかつICTを活用する事で前進が期待できる領域として、聴覚障害者への情報保障が浮き彫りになってきた。大学の授業を理解し、伝えられるノートテイク・手話通訳・要約筆記者を随時用意することは、大学側にとって財政的にも人的にも容易ではない。今後さらに盛んになるであろうeラーニングやデジタル化された視聴覚教材制作においても、こうした情報保障は大きな課題である。そのような意味で、本特集では、前半において内外の高等教育における障害者支援や就労における支援、ユニバーサルデザインと人間中心設計の思想的発展に関する論考を掲載し多様な学習者支援を概観し、後半においては聴覚障害者支援、字幕関連に焦点があてられている。高等教育における障害者支援のニーズとICT活用が交差する現在最も注目すべき領域として理解していただきたい。

最後に本特集の発行にあたり、ご投稿いただいた著者の方々、および、ご多忙中にもかかわらず、遅滞なく審査に協力していただいた査読者の方々には心より感謝する次第である。